不定期刊行　　第629号　2017.12.02

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

ジャマイカ・ブルーマウンテン登山　その2

Ｉさんによれば、これまで下山時に降られることはあったが、午前中からの雨は初めてだという。

しかし、経験上ジャマイカでは雨は一時間もすれば上がるのが普通だという。しかし、20分ほど雨宿りをしたが、一向に止む気配はない。このくらいの雨で怯む私ではないが、一緒に来たジャマイカ人が軽装なのが気になる。一人は薄いビニールガッパ、もう一人は何も持っていないようだ。うーん、これは。しかし、彼女たちは意気軒高。行こうという。ドイツ人のN氏はザックを背負った。出発だ。熱帯とはいえ、2300mを目指そうというのである。少し心配ではあったが、僕も続いた。ポートランドギャップから再び山道に入るところに、入山料一人200ジャマイカドル（ほぼ日本円の200円に相当）との看板があったが、道は比較的整備されていて、人も少ないせいかゴミもなく快適だ。（レンジャーの詰所のところにある便所は使う気にならないということだったが・・・。）

このあたりからは、原生林が美しい。サルオガセが垂れ下がる、亜熱帯の樹林である。遠くの景色は何一つ見えないものの、手つかずの自然の醸し出すこの雰囲気は素晴らしい。

Ｃ嬢が先頭でひたすら頂上を目指す。歩くこと3時間50分、8:50に山頂に到着。震えながらもはじめて自国の最高峰に立ったM、Ｓの両嬢は歓声をあげている。頂上は双耳峰になっていて、その片方にはモニュメントが立っていた。なんと山頂にはアジサイの花が咲いていた。

天気がよければ、眼下にキングストンの町を望み見、南にも海、北

にも海という景色が望めるはずだったのだが、残念ながら眺望はゼロ。期待していた景色は見えなかった。登っただけ、また単なる自己満足の山ではあるが、しかし、苦労して登った山の頂上は尊い。全員で山頂で撮った写真は貴重である。4か国友好登山の証明だ。

登ったあとは、三十六計逃げるが勝ち。一気にポートランドギャップまで下った。すると、皮肉なものである。Ｉさんの言った通り、天候は一気に回復し、青空が一面に広がった。悔しかったが仕方がない。青く光る山を見て、臍を噛んだ。濡れたものを乾かしていると、レンジャーが寄ってきて、しっかり入山料を取られた。

カラーが自生していた。

天候が回復し、ポーランドギャップからは山頂（？）が望めた。

天候も回復した帰り道は、朝真っ暗で何も見えなかったコーヒー畑を見ながら、のんびりと下った。斜面は一面コーヒーの木だ。途中、国鳥であるというハミングバード（ハチドリ）を見ることもできた。背中が黒く、腹は美しい緑色、赤い嘴と長い尾をした気品のある鳥だった。異国の雰囲気を感じながら、とても貴重な経験ができた登山であった。そうそう行けるところでもないので、写真を中心に報告をさせていただいた。ジャマイカは治安が悪く、一人ではなかなか行けない。息子の案内でその後、３日滞在したが、カリブ海はエメラルド色に光り、人々もフレンドリー、ジャーク料理など食べるものも美味しくて、いつまでもいたいなあと思う国だった。

山頂のアジサイ

コーヒー園